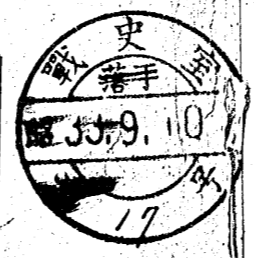


電子複写不可

沖繩戦没学徒部隊資料



防衛研修所戦史室

4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3

本部。千早隊（宣伝情報）。野戦築城隊（後に特編中隊に別
此る）。自治班。

編成後も築城作業が続けられ、壕内では戦訓示、爆雷
の操作訓練等があった。

三月三十一日午後八時頃、軍司令部から駒馬少佐が派遣さ
れ、軍への正式編入を伝達され、その晩のうちに左のとおり
編成し夫々任務についた。

本部員 一六名。千早隊 二二名。斬込隊 五六名。

野戦築城隊 二九一名
一 中隊
二 中隊（米軍上陸後四八名特編中隊へ）
三 中隊

千早隊の行動状況について（神繩師範学校）

昭和二十年三月二十一日二二名で隊を編成、四月一日軍司令部情報部に
おいて二班に編成された。

全日益永大尉から情報宣伝要領について訓示を受け、中部は涌添、
宜野湾、中城方面へ、南部は東風平、玉城、具志頭、豊見城方面ま
で、壕から壕へ住民への情報宣伝に従事せしめられた。米軍が南
下するに従って中部方面の行動範囲は縮小され、必然南部への
行動が頻繁となり、五月中旬頃から極度に情勢が変
化し、宣伝のみでなく弾薬運搬等もせざるを得なくなつた。

五月二十七日軍司令部から、千早隊は直ちに軍司令部前に集合
せよとの命令を受け、用務に出ている四五名を残して全員集合
した。そこで伝達された命令は、軍司令部は摩文仁に転進するから
千早隊は先発隊として、今夕六時出発せよとの命令であった。

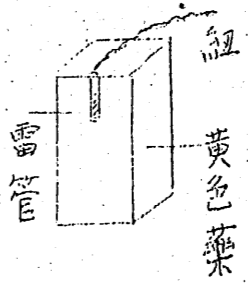
六時を期して酒井曹長の指揮で出発、識名、一日橋、津嘉山、兼城、座
波、眞壁を通り、五月三十日午前九時頃、摩文仁に到着した。

それ以後便衣に着替え、南部一帯の情報宣伝に従事した。
六月十八日夕暮、敵中を突破して北部に脱出し、再起を図れとの命令が
軍司令部から出され、翌十九日二十日に殆んど全員三々五々に散って行った。

千早隊
千早隊
千早隊
千早隊
千早隊
千早隊
千早隊
千早隊
千早隊
千早隊

一、爆薬の使用法

。黄色薬の性質。その取扱法について
。導火索の着火方法および爆薬の操作要領



- 二、敵戦車に對する肉迫攻急要領(爆薬携行)
- 三、敵幕舎内に忍び込んで爆薬を投げ込む要領
- 四、敵兵の寢込みを襲って毒薬の注射(砒素剤)
(何分後に死ぬかを美繪)

右訓練のほか、留魂壕前、歩哨勤務および糧秣運搬、南風原陸軍病院へ負傷兵の担架運搬等に仕じた。

四月廿四日、仲地朝問は特別任務を受け、岡軍曹と共に留魂壕を出發、運玉森の東側麓壕(海岸に面した処)から特攻艇(〇)と呼ばれて(いた)を出して、予て敷設してあったレール上を與那原の與原海岸まで送り、兩名は與原海岸から〇に便乗して

北部へ向って突進した。

特別任務の内容は、無線機二機を携行して久志山中の村上大尉の指揮する護郷隊との敵後方攪乱に関する連絡であった。

岡軍曹、仲地朝問を送り出してから帰途、運玉森西側の小さい立込みにあった際、米軍の砲弾が林少尉の附近に落下、全少尉は右こめかみから左こめかみに貫通する破片創により即死した。遺体は下の島に埋葬して留魂壕に帰った。

隊長林少尉の戦死後は、各分隊に分隊長として下士官一名づつが配属され、指揮は各分隊毎に分隊長がとつた。

五月五日、ハンタ山にあった軍司令部壕に連絡の途中、内間安和は右大腿部に砲弾破片創をうけ、その日のうちに南風原陸軍病院に運ばれ入院した。

五月七日、東江政昌は、佐藤上等兵に引寄せられ、首里辨ヶ岳北方に進軍して来た敵戦車を肉迫攻急すべく、辨ヶ岳西方にヤシをか、つた際、敵迫撃砲が至近弾により頭部を破碎され即死した。
五月廿六日頃までは石の勤務作業をしながら留魂壕に位置していたが、今日午後五時頃(連日大雨続きであった)軍司令部から廣文仁へ撤退せよとの命令が出たことと各分隊長によって知らせ

中野大尉 西中隊 中野隊 中野隊

此、全員司令部壕に集合、広瀬大尉から大要次のような訓
辭をうけた。

「貴様達は死ぬるか、武士は死に切る覚悟が第一だ。此からは
貴様達の郷土は決戦場となるが、至誠殉国の精神を以て最
后まで郷土防衛のため挺身して呉れ。」

広瀬大尉の声涙共にくだる悲壯な訓示に全員血が沸きかえり
思いがして、全員感激の余り、周囲から鳴えつの声さえ聞えた。
五月二十七日未明(午前二時頃)首里司令部壕出発の命令
が下り、金城町―繁多川―津嘉山―外間―友寄―
東風平を経て退却したが、東風平の三叉路で各分隊長合議の
結果、各分隊に各自の行動をとることに成り、六分隊は各々
分隊長の指揮で輿座方面、具志頭方面、眞壁方面とそれぞれ別行動
をとった。

五月二十七日撤退を開始した直后、繁多川において、城田栄は大腿部
に砲弾破片創をうけ、仲地萬藏は火傷のため、附近にあった山部
隊の野戦病院^{山部}に搬送された。野戦病院壕は大雨続きのため、浸
甚だしく、寝台に寝ている患者も水浸しになる状態であった。
城田、仲地両君をそこに残して去るのは忍びなかつたが、どうも是

置が出来なかつた。そのまゝ、全病院壕に残して南部へ退った。
東風平村三叉路に着いてからの各分隊の行動は左のとおり、

第一分隊は東風平村の三叉路から具志頭村の後原に行き、
ここで一日休養して待機することになり、分隊長久木田章典
から爾后は分隊を更に三名宛三班に分けること、服装は上
服でなく一般住民の服装とすること、出来得れば新聞記
が逋査の服裝がよいこと、行動を開始したら適宜適当な場
で変装すること、目的任務はあくまで敵地侵入、爆雷に
よる後方攪乱にあること、連絡は森文仁軍司令部附近にある
勤皇隊本部にすること等の説明をきいた。
三班に分れたその一班は、室比久、仲座、比嘉(善栄)がいたが他
の班員より一足先に後原部落を出発した。
当初適当な陣地をさがしたが見つからず、具志頭村安里の部
落に到着、その日は(六月の初頃)そこで宿泊した。翌日また適
当な壕陣地を探し、輿座^{仲座}に行つたら野戦重砲部隊
がいたので、その陣地に行き隊長に面会を求めて、斬込隊の任
務を説明、何とか壕を世話して呉れようかと頼んだが、ことわり此
仕方なく具志頭村南方俗稱「ギーザバンタ」附近に一時落着

東風平村三叉路に到着、そのまゝ、全病院壕に残して南部へ退った。

特編中隊の行動状況について（沖繩師範学校）

昭和二十年五月七日野戦築城隊より配属をとりかれ、新たに左記編成により四八名の者が特編中隊に編入された。

- （久保中尉）
- 特編中隊
- 四八名
- 一 小隊（渡辺少尉） 一 二名（勤皇隊員）
- 二 小隊（安谷屋少尉） 一 二名（ ）
- 三 小隊（加藤少尉） 一 二名（ ）
- 四 小隊（ ） 一 二名（ ）

位置は首里城下留魂壕から軍司令部壕（記念運動場の真下）に移った。作業は連日糧秣運搬であった（首里市二国民学校より壕まで）。その頃から戦況は一日と凄烈を極め、首里市石嶺の東北方まで米軍が来て、いるとの噂があった（五月十五日頃）。

五月二十二日頃に至り、首里戦線は危機にひんし、絶望を暗示するかのようには、特編中隊は急造爆雷（一五キロ、二〇キロの二種類あり）を各人二個づつ、携帯して麻文仁方面に運ぶため、首里の司令部壕を出発、津嘉山、東風平（友寄）に至り、麻文仁の自然壕に向った。途中東風平村友寄に休止した。

当時、東風平村友寄には野戦兵器廠の壕があつて、其処に今日爆雷があつた。特編中隊は友寄の壕附近に小休止后出発、今日

中隊
野戦兵器廠
野戦兵器廠
野戦兵器廠
野戦兵器廠
野戦兵器廠

夕刻摩又仁の自然壕に到着した。

翌日全員命により東風平村友寄の壕から爆雷を運搬すべく
出発したが友寄に行つて見たら、友寄の壕は米軍の猛爆轟
のため跡形もなく破壊され、埋没の状態にあつたので、空しく摩
又仁の壕に引返した。

摩又仁の壕において隊長にその旨報告すると、如何なることがあつ
ても掘出してまいとの嚴命で、再度友寄に向つた。
友寄の壕に到着して見ると、壕の破壊状態はますますひどく、
掘返すことは到底出来ないので認め、そのまま又摩又仁の壕に
歸つた。

五月廿六日頃隊長の引率で、一部の監視員を残して、再び首里の
司令部壕に復歸した。が、それは首里戦線を撤退する軍司
令官護衛のためであることがあとでわかつた。

五月廿六日午後十時頃軍司令部は摩又仁に撤退することに
なり、軍司令部の前衛として特編中隊が軍司令部の前に位置
し司令部壕を出発、聖路は識名―日橋―長堂―與座大里―
新垣―真栄平―摩又仁で、二日間を要して摩又仁の司令部壕に

到着した(五月二十八日頃)。

摩又仁、自然壕は(図示の通り)牛島司令部壕の西へ四〇〇米位
の地裏にあつて、特編中隊は全員その自然壕に入った。

摩又仁の自然壕に到着してからの毎日の日課は、主として津嘉山ら
よび東風平方面からの糧秣運搬作業に従事し、作業は殆んど
夜間になされた。

戦局は極度に悪化の状態にあるもの、如く、連日間断ない砲爆轟
の炸裂は、完全に友軍を沈黙せしめ、友軍の毎日の行動は夜間の
短時間に限られた。

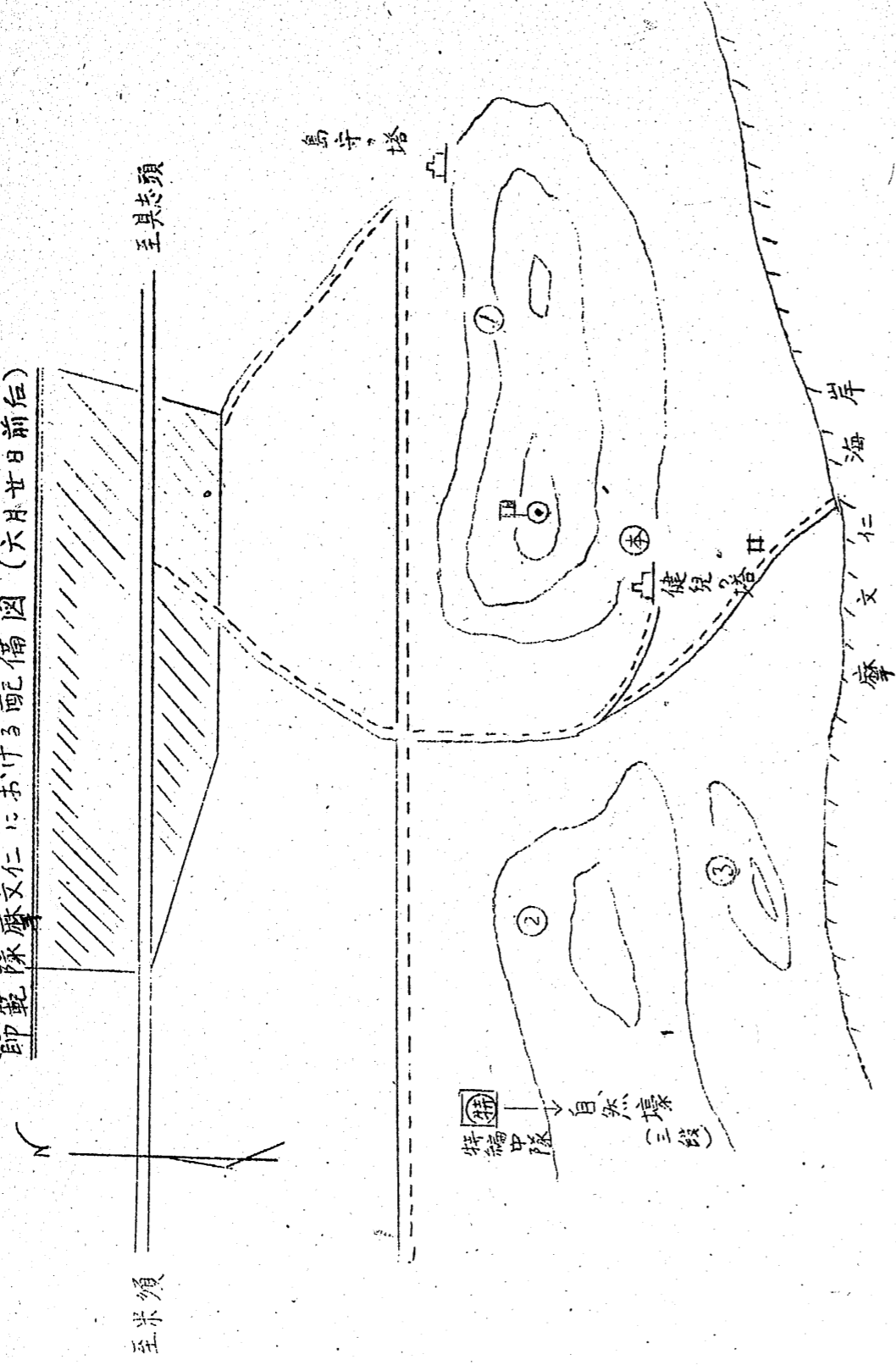
六月五、六日頃に至り、米軍は漸次攻惠の手を早め、その先鋒
は東風平附近まで来て、その情報なきにこえて来た。

六月十五日頃になつてからは、全く行動は制束され、殆んど壕に釘
づけの状態にあつた。割合に近い軍司令部までの連絡も難澁を極
め、死傷者続出の状態であつた。

六月二十日に至り、軍司令部との連絡も麻痺状態になり、羽立
二十一日久保隊長は、敵中を突破して、北部へ脱出すべく、残

中隊
第一中隊
第二中隊
第三中隊
第四中隊
第五中隊
第六中隊
第七中隊
第八中隊
第九中隊
第十中隊

師範隊摩文仁における配備図（六月廿日前任）



員を率いて真栄平へ向つて突進したが、途中で米軍戦車の
 攻塵に遭遇して隊長は戦死、部下も過半数戦死傷続出
 し、遂に進塵することが出来ず、摩文仁海岸壕（元壕より五
 〇〇米位西方）に漸く集結、そこでようやく十四名の人員を救
 えることが出来た。その他の者は敵中突破の際敵戦車砲によ
 つて戦死したものであると思われ、翌二十二日の朝をこの壕で迎えた。
 二十二日朝、突然米兵らしき一隊の来攻を察知し、全員投降
 することに決して壕から外に出たら、米兵の多数が自動銃
 をかまえて投降を強いたので全員米軍に收容されるに
 至った。

野築才一中隊の行動状況について（沖繩師範学校）

一 四月一、二日頃一中隊（八〇人）のみ、戦斗配備に付け、この命令を受けて軍司令
部才五構道に配備され、交替制で立哨、警戒、伝令の任務に服し、非番番
は壕堀り等雑役に当たられたが、四月二十七日か八日頃山部隊工共才西連隊に配属
替えとなり、築城および道路の補修作業に従事した（約一ヶ月）。

二 五月二十八日首里撤退の命令を受け、翌二十九日出発、誠名、国場、長堂、高安、
平良、賀敷、高峯、新垣を至て三十日午後十一時摩又仁部落に到着、二晩
部落内で休養したが、翌三十一日昼頃豊見城村長堂へ食糧受領の命を
受け、四〇名位の隊員が選抜され、下士官一名の引率でその日の晩出発、撤退した
コースを逆に行き、午前一時頃長堂に到着、夜明けまでに荷造りをなし、登
中壕内に待期してのち、六月一日の晩長堂出発、途中事故もなくその日の晩に
摩又仁に着いた。これまでは山部隊の指揮であったが、六月二日以後は軍司令部
附となり、立哨、警戒にあたるがたわら、築城に従事することも食糧確保等
に使役された。

三 六月十八日暮方本部から伝令が来て、軍司令官からの命令を伝えた。それは隊
互を解き、敵中を突破して国頭へ脱出し、再挙を図れとのことであった。
翌十九日夫々三々五々思ひ儘の行動に入ったが、米軍は既に摩又仁部落
まで進攻し、海上の船舶は海岸近くまで接近し、昼間の行動は全く不
可能の状態であったため、岩影や壕において日暮を待ち、翌暮から夜
間にかけて行動が開始されるという状態であった。

中隊
野築才一中隊
野築才二中队
野築才三中队
野築才四中队
野築才五中队
野築才六中队

野築オ三中隊の行動状況について(沖縄県師範学校)

昭和二十年三月三十一日の晩、第二野戦築城隊に入隊(隊長松宮大尉)。

入隊後、晝間は殆んど障地構築に従事、夜間は交替制で食糧・彈薬・遺棄品に従事、その合間は壕内に於て戰鬥訓練がなされた(五月二十七日まで首里留魂壕)。

五月二十七日、軍司令部からの撤退命令があり、翌二十八日午後八時か九時頃、首里を出発、識名、国場、油井間、長堂を通り、賀数で一泊。翌二十九日、晩出發、高峯、小渡を通り、五月三十日の晩、摩文仁に到着。

中隊
野築オ大
信
四中隊
五中隊
六中隊

野築才三中隊の行動状況について（沖繩師範学校）

摩又仁到着後の状況

摩又仁に着いたのち、豊見城長堂からの食糧運搬および築城に従事、總て下士官の指揮によってなされた。

六月十日頃から病人を残り、興座、仲座方面に配備していた美田連隊（独混才一五連隊）に全員応援に行つた（中隊を指揮していた松宮大尉以下下士官も同行）。美田連隊はその頃隊員殆んど全滅の状態に及び、下士官以上は美田大佐以下僅か五六名しかおらず、学徒隊が主力となつていた。

その頃は雨季であつたが、昼夜兼行で陣地を構築、夫々部署について待機していたところ、十四日頃から雨が止み、午前九時頃八重瀬岳の方向から、仲座部落を突切つて戦車が来襲、湊川の方向から、海岸伝いに狙撃兵が来襲し、一時応戦したが忽ち包圍され、松宮中隊長が西大腰部貫通で戦死、その日は一日中見動きもできず夕コ壺壕の中で息を吞んでいた。夜間になつて米兵が引揚げた頃、もとの陣地摩又仁に後退したが、米軍も後を追つて進攻。糸満方面からの米軍もこの頃真壁方面まで進出し、摩又仁は完全に包圍されて、それ以来昼夜は壕の中に退避し、夜間敵の形勢を伺つ、行動するのみで苦戦におちいた。周囲からはスピーカーによって投降を勧告していたが、軍司令部は敵中突破して国頭に脱出し再起を図れと、十八日の晩命令を發し、その後それれ三々五々に出発した。

中隊

野重

大

信

西中隊

五中隊

中隊

隊

沖繩県立第一中学校鉄血勤皇隊

一編成

昭和二十年三月二十五日午後二時頃、配属將校篠原中尉は、聯隊区司令部から命令を受領して、一中校南側養秀寮において、全中尉から聯隊区司令部代理永田大佐名による、一中鉄血勤皇隊の編成および召集命令が伝達された。

今日午後五時頃、篠原中尉の命により、仲地清雄（当時四年生）外二名の者は、急遽養秀寮に招集をうけ、学校の書記と共に首里近郊、宜野湾、浦添、真和志一帯に在住する生徒を主とする令状を午前二時まで、かつて作製した。

二十六日午前中、篠原中尉と前記三名の生徒は、首里および近郊の壕を空爆の間を縫って、令状の配布のために東奔西走した。寄宿舎の生徒も浦添、西原、宜野湾方面へ今日令状の配布に懸命となった。

昭和二十年三月二十七日晩、防空壕の中で最後の卒業式が挙行され、参列した者はその場で正式な革命による防衛召集が決定された。その時、軍司令部八原参謀から激励の訓示があった。

卒業式終了後は全員帰宅を許さぬ、直ちに勤皇隊が編成され、北中五砲兵司令部（球九七〇部隊）に配属されることになった。

中勤

野重

大

信

四中隊

五中隊

中隊

下

中勤

勤皇隊の編成は、左のとおりであったが、各小隊毎に指導兵七名位(伍長、兵長各一、上等兵、一等兵五名)が配置された。

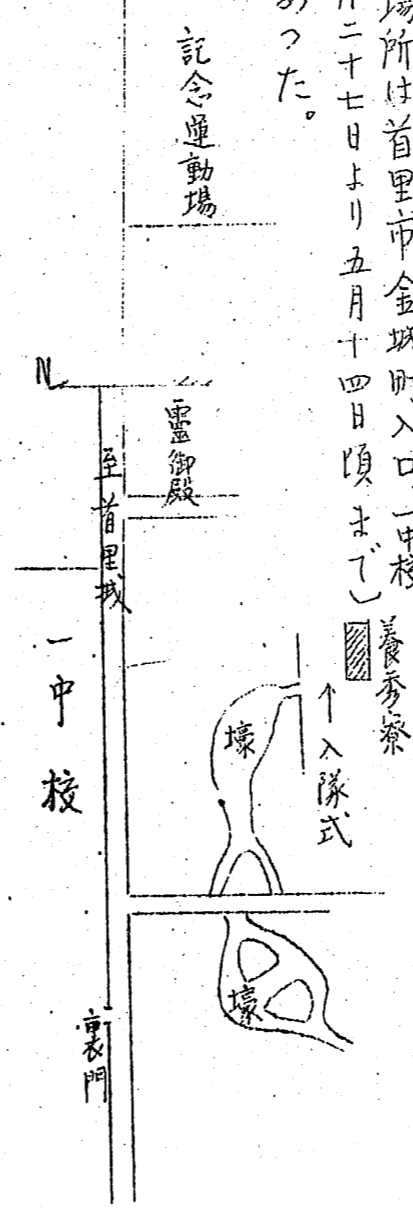
- 隊長 中一小隊(指導兵七名配置) 約一三五名
- 篠原中尉 中二小隊() 約一三五名
- 中三小隊() 約一三〇名

右編成人員は、五年八五名、四年一五五名、三年一六五名であった。昭和二十年三月二十九日、午前八時頃、養秀察前において球九七〇部隊入隊の儀式が行われ、各人二等兵を命ぜられ、その旨を上官に申告した。

今日軍服一式が支給され、階級章(二等兵)もつけた。

兵器は学校にあった三八式歩兵銃を利用、不足の分は球九七〇部隊司令部から九九式小銃が配られた。

勤皇隊の配置場所は首里市金城町入口一中校南側であり(三月二十七日より五月十四日頃まで)養秀察下図の位置にあった。



三月廿九日入隊式の日から球九七〇部隊の指示により陣地構築に重兵がおかれ、併せて弾薬、食糧の運搬作業に従事した。右のうち陣地構築は三交替の八時間作業で実施された。

一部は肉攻訓練(タコ壺利用)、補線作業および対空監視勤務に(九七〇部隊司令部の監視哨三ヶ所に配備)従事した。

そのため、九七〇部隊司令部から左記の下士官、兵が訓練および内務教育のため、部隊本部に起居して教導にあたった。

渡辺見士。林伍長。船垣兵長。馬場上等兵。柏木上等兵。一等兵三名。

三月廿九日から五月十三日に至るまで勤皇隊の配置場所および勤務、作業の内容は概ね左のとおりであった。

配置場所 養秀察前一中既設壕(前図参照) 勤務および作業 中五砲兵司令部監視哨(三ヶ所)の立哨

勤務、軍司令部の壕掘り作業、陣地構築作業

各中隊への配属
昭和二十年五月十四日に至り、勤皇隊は中五砲兵司令部の命により

野重・大 野重・大 野重・大 野重・大 野重・大 野重・大 野重・大 野重・大 野重・大 野重・大

それぞれ左の各部隊に配属された。

勤皇隊本部

砲兵司令部

野重中一連隊

野重中一〇大隊

独工中六八大隊

測地中隊

各部隊については別冊に状況を記載する。

勤皇隊本部の行動状況について（沖縄県立才一中学校）

昭和二十年五月十四日までは一般状況（沖縄県立才一中学校鉄血勤皇隊）と全いである。

五月十五日未明、豊見城村保栄茂にあった野砲中四連隊が首里に進出して勤皇隊の壕を使用したため、交代して保栄茂の元同部隊観測所があった壕に移動。

同地において首里で負傷した隊員約十四五名の看護に当った傍ら、砲兵司令部との連絡、勤皇隊から他部隊に配属となった勤皇隊員の状況を調査した。

五月二十四日頃、首里戦線より石部隊野戦病院が豊見城所保栄茂附近に撤退したため、勤皇隊使用の壕を利用することになり、六月一日職員二名、隊員七名を壕探しの任務と与え南部面に先発派遣した。

一中本初

野重中一〇大隊

野重中一〇大隊

野重中一〇大隊

野重中一〇大隊

野重中一〇大隊

野重中一〇大隊

野重中一〇大隊

海岸附近の壕に二日程うづくまつて居た。米兵らしい話声や口笛などが聞えて来て、間もなくマイクで投降するよりの放送が聞えて来たが、米兵が拳銃を擬して出て来いと通訳を通じた。どなつたので一人々々仕方なく外に出て米軍に収容された。日時は六月二十二日頃になつていたと思われぬ。その日に佐敷村の収容所に入れられた。

野重一連隊配属の行動状況について（沖縄県立第一中学校）

- 一 配属人員
 - 一〇名（五年）
 - 二七名（四年）
 - 四五名（三年）

ニ 行動状況

五月十四日午後八時頃首里の一中壕を出發、東風平村志多伯在の野重一連隊医務室に配属となつた。四年生二七名の長は四年の山城興文であつた。任務は主として患者の輸送及び伝令勤務であつたので、連日首里の砲兵司令部（九七〇部隊）より患者を志多伯の医務室まで輸送した。伝令は廿日兵一名、勤皇隊二名で志多伯から連隊本部へ連絡のため派遣された。その他の作業としては、炊事、糧食の仕立、収集等であつた。右の作業、勤務に従事しつゝ、志多伯に六月三日まで居た。喜瀬眞昭（四年生）は五月三十日連隊本部に連絡のため、砲爆虫熾烈の中を伝令として出發し、帰途山川附近で艦砲弾、破片創をうけ、重態におちいつて間もなく死亡した。そのことは同行の桑江建が日つてからの報告であつた。

五月廿七日頃命により陣地壕へ撤退すべく、先発隊として約十名が真壁方面に向つて出発した。六月三日南部への退却命令が下り、その夜うちに患者と食糧一切トランプ(四色)に塔載、真壁村宇真壁の壕に移動した。(志多伯一与座一六里一真壁)

六月四日の朝(未明)真壁の壕に到着した。その日の午前七時頃命により志多伯の壕へ残物整理のため兵一名と比嘉重智と二人で行つたが、その時はすでに米軍の戦車が南風原村の山川附近に未攻していることを、附近を通りかかった山部隊の兵隊からさかされた。志多伯北方の高台に上つて山川方面を望むと、戦車らしいものが行動するのを散見した。真壁村の壕では、部隊本部はすでに真壁まで来ており、部隊本部と全じ場所(位置)に位置したが、その壕に未だからは、主として戦死、戦病死者の埋葬及び北方周辺を監視する歩哨勤務、食糧の確保、患者(傷病者)の看護に従事した。その頃から真壁壕附近には、連日連夜首里方面からの各部隊の兵隊が入り乱れ、間断ない砲爆撃は晝間、行動を全く許さず、行動作業は日没後においてなされた。

六月十九日頃に至り壕内に正詰にされた恰好となり、そのまゝ犬死する許りだから何とかして血路を開いて敵中を突破、遊撃戦に出るのが得策だとの命により、小隊(二十七名のうち一名戦死)は三田分隊に分れ、各分隊に二三名の兵隊がついて敵中を突破すべく、六月十九日午後十時頃、手榴弾各人二個づつ、急造爆雷一分隊に一個づつ携行して壕から突進したが、周辺に迫った米軍の警戒最重を極め、銃砲火の集中射撃はしく前進することが出来ず、又元の壕に引返した。引返したときは七名だけであつた(比嘉重智証言)。その晩、敵中を再び突破すべく、待機中、防衛隊員(その壕には防衛隊員も一緒であつた)の歩哨が米軍の未攻に狼敗して壕内に入り込もうとした際、入口にあった水汲用の石油缶を、不覚にも足で蹴つたため、その音響で米兵に発見され、壕入口に黄燐弾を投げ込まれた。そのとき壕内には野重一連隊の副官以下下士官兵数十名位と、勤皇隊員七名もいたが、間もなく米兵が通訳を同伴し、銃をかまえてやって来たので、副官の指示により、全員武器を捨てて米軍に投降することに決し、全員壕内から出た。直ちに身体検査をうけて真壁国民学校に連行され、翌日真

玉橋の收容所に移された。七名の勤皇隊員は全員元氣である。山城興文を長とする分隊は勤皇隊員六名であった。

六月十九日敵中を突破して北上すべく壕外に出たが、米軍の猛攻はげしく、夜間を利用して真壁壕から米須にさがり、更に摩文仁に移動して軍司令部壕下の海岸に出て、海岸がたいたにギルザパンタの岩陰に行った。ここに移る途中一行中の城間隆が軍司令部壕下の岡の上で米軍の迫撃砲弾により即死した。

ギルザパンタの岩陰に待避しているとき、南方海上から米軍のL.C.T.が接近して、スピーカで盛んに投降の宣伝放送が聞えてきたが間もなく米兵の一隊が自動小銃を擬して岩陰前にやつて来た。

今や如何ともし難く、五名(うち一名は何時の間にか行方不明になっていた)は全員米軍の前に手を挙げた。その日のうちに佐敷村の收容所に收容され、その後屋嘉收容所に移された。

○興那城朝章を長とする分隊は、兵三名と勤皇隊員九名であったが、真壁の壕から六月十九日深夜、摩文仁村に近(真壁壕か

ら約千米位の地奥)壕に待避し、明日を期して敵中突破を決行しようとしてひそんでいた。夜明け前になつて耳をすすると、米兵らしい証声と口笛の音が聞こえて来た。

突嗟に緊張した空気が吾々の間にみなぎつたが、そのとき壕の入口にいた照屋正幸が米兵の方に向つて手榴弾を投げたため米兵に発見され、米兵から黄燐弾を三発投げ込まれ、入口にいた三名が即死した。

残つた者は壕から出るにあらぬ、各々手榴弾で自決すべく、真火索をひいたが破裂するに至らず、その壕内にうづくまつていた。米兵はそのまま、何の探索もせず、壕の崩れから去つたらしく、証声も聞こえず、人のいる気配もせず、そのまゝ、夜を迎えた。

残つた六名は其の壕から這い出て、そのまゝ、南部海岸に向つて後退し、摩文仁軍司令部壕南方海岸附近に到着した。海岸に沿つて具志頭方面に行動中、全行の二人がいつの間にか行方不明になつてゐることがわかつた。

ギルザパンタの手前岩陰附近に来たところ、米軍の舟艇がマイク放送をしながら海岸に接近して来た。間もなく米兵が舟艇から海岸に上陸して来て、自動小銃を擬し

一〇中隊 二〇中隊 三〇中隊 四〇中隊 五〇中隊 六〇中隊 七〇中隊 八〇中隊 九〇中隊 一〇〇中隊

て投降を迫った。四人はそのまゝ米軍に投降、身体検査をせしめ、米軍に収容された。
今日玉城村、垣花に移され、種々と取調べをうけたが、四名共身長が比較的短小だったため、その日のうちに一般避難民として釈放された。

資料提供者 比嘉重智（四年）

山城興文（四年）

興那城朝章（四年）

通信隊の編成入隊の状況について（沖縄県立第一中学校）

一 編成

昭和十九年末頃量の命令で、県立一中校生徒二年生約二〇〇名位を以て編成され、一中校の舎に於て編成時から昭和二十年三月中旬頃まで電信第三六連隊（球ノダス）の佐藤中尉、小上橋中尉、助教鈴木伍長等によつて、モールス信号、通信機、標法、發電機、標法等について教育がなされた。

昭和二十年三月二十日頃から承諾書（少年特別志願共願書とかいてあった）用紙が配られ、各自親の承諾印を貰つて来いと言われ、一応家族の許に归された。
二、三日後に親の承諾印を貰つて提出したが、中には親が承諾しないので、印鑑を盗んで自から捺印して提出した者もいた。

昭和二十年三月二十八日頃召集令状により、約一四六名位（教育期間中事故及び日本本土疎開のため一四五名位が残る）が電信第三六連隊（長大竹レ佐）に入隊を命ぜられ、同日午前才時頃首里市金城町在り一中校養秀寮下に集合し、そこから真和志村繁多川在り部隊本部壕前広場に行き、入隊式が行われた。その後各無線中隊に配属された。

通信
一中隊
二中隊
三中隊
四中隊
五中隊

